

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三號

第三十七卷

昭和八年九月一日發行

論 叢

- 織物消費税に就きて……………法學博士神戸正雄
勞働の供給について……………文學博士高田保馬
赤子の夭折統計觀……………法學博士財部靜治

研 究

- フランスに於ける爲替安定と平價切下……………經濟學博士谷口吉彦
産業組合の本質……………經濟學士八木芳之助
會計學に於ける基本的規定に就いて……………經濟學士蜷川虎三
信用統制と支拂準備政策……………經濟學士中谷實

說 苑

- 海運に於ける「市場の配分」と運賃構成……………經濟學士佐波宣平
贈與の合算課税……………經濟學士三谷道磨

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁 轉 載）

赤子の夭折統計観 (二)

財 部 静 治

五

乳兒死亡を男女、季節、都鄙、貧富、嫡私出等の別により解析し、特に又その多少に關係ある諸原因の統計的研究に當るは、興味多しと雖も吾人は凡て之を別編に譲り、前に一言せるが如き本編の主眼に向ひて進まんと欲す。

本邦府縣別乳兒死亡率近年の狀況に照し、最高を示せる青森縣（北地にある石川及福井の二縣も一般に高率を示す）並に最低率の二縣に就きて看るに、左表を得たり（第四十七回及第五十一回年鑑五二頁に據る）

乳兒死亡率

	青森縣	鹿兒島縣	沖繩縣
大正一二年	二・三・二	一〇・七	五・六
〃 一三年	二・一・〇	一〇・五	六・四
〃 一四年	一九・〇	九・五	七・七
昭和元年	一九・七	一一・一	六・四
〃 二年	一九・一	九・七	五・九
〃 三年	一八・五	九・六	五・六

四年	二一・三	九・六	七・三
五年	一八・一	九・七	六・〇
六年	一七・七	九・七	六・六

南北による乳兒幸不幸の相違を窺はしむべき、一應の材料は之により授けらるゝとすべきも、之丈けにてはその率推移の一般傾向を辨識せしむるに足らず、こは全國に關する比率が前記の如く大體に遞減の傾向を辿ると同軌ならず、從ひて本邦が現在及近き將來に亘り、諸文明國とその揆を一にし、悦ふべき趨勢を呈しつつあるやを疑はしむと雖も、最近數十年中遞減の實を頗る鮮かに擧げしは獨逸なり、前出 *Meumann* の小百科學辭彙中大觀せる所によるに、獨逸の乳兒死亡率は大に減じたり、七〇年代の初め出生者の四分の一、一九〇〇年には尙五分の一を占めしが、一九二七年には十分の一、二八年には八・九%を占むるに過ぎすとせり、右半世紀餘の間に於ける兵器の大變革に驚異の眼を注ぐべくは、獨逸に於けるかかる濟生の大事功にも學ふべきものあるを覺るべきなり、兎に角その比率を一層詳察することとし、主として *Bortkiewicz* の研究にその料を仰くこととせんが、普國に於ける出生千に付乳兒死亡數一八七五—一八〇年二〇六、一八八一—九〇年二〇八、一八九一—一九〇〇年二〇三、一九〇一—一九〇九年一七九、一九一〇—一九一三年一六一 (O. Most の前掲書再版によれば、一九〇三年、二〇四、一九一三年一五一、一九二三年一三三、一九二四年一〇九、一九二五年一〇五なり) たり、從ひて世紀變りに際し恰も乳兒救護策が力強く採用さるるに至りて、明白に改善の實を擧げ、その時に至る迄乳兒死亡が殆んど確實に同一高率を續けたるとその面目を

異にせり、之と共に普國にありてはかの古くより有名なる「統計常例」上、乳兒死亡は都にては田舎に比し高しとせられたるもの、謂はば「人爲」の力にてその反對に轉廻するに至れり、即ち一九〇六年迄は例外なく都市に於て、一九〇七年來（一九一三年迄）は例外なく田舎に於て不良狀況を呈す、而もそは嫡出にも私生にも見る所なり、假令ば一九一三年中乳兒死亡は、嫡出につきては都市一三二%、田舎にては一四六%、私生につきては都市二四一%、田舎二七二%を示したり、

（巴威里にては田舎に於ける乳兒死亡超越は古くより然り、同國一圓として一九一〇年にも尙二〇・二%を示せるに、首府民顯にては一九〇七年時の市統計所長たりし M. Singer の報告 Hygiene u. soziale Pflege in Antwerpen, S. 23 によるに出生百に付一八八六年三三、一八九六年二五、一九〇六年一九・六たりき、本邦に於ても近年かゝる傾向を伺はしめずとせず、即ち前引用動態統計記述編によるに人口十萬以上の大都市乳兒死亡率を「全國の場合に比較すると、從來は大都市に於て常に高率であつたか昭和三年以後は大都市に於て却つて低率を示す」、左表之を明かにす）全獨につきての乳兒死亡は一九〇五年の

出生百に付一歳未満の死亡		二〇五%より、一九一五年の一五四%に下れり、尤もその間特に天氣模様（個別曆年に於ける夏季の大暑。夏の大暑が獨逸にては本邦程高からず、又本邦と異り大濕を伴はざるに拘はらず、幼き者に危険なるを證する統計は夥し、茲には單に民顯市統計所が一九一〇及一九一二年二六の獨逸大都市に就き、八月中の乳兒死亡比較を試み、その結果諸大都市にて出生者の三分の二乃至五分の四の生命を奪へるに、民顯市にては二二・五%に過ぎざりしことを發表せるの一	
大都市	全國	獨逸	民顯市
昭和元年	一四・二	一三七	二二・五
二年	一四・六	一四・二	二二・五
三年	一三・五	一三八	二二・五
四年	一四・一	一四・二	二二・五
五年	一一・七	一二・四	二二・五

結果諸大都市にて出生者の三分の二乃至五分の四の生命を奪へるに、民顯市にては二二・五%に過ぎざりしことを發表せるの一事を指摘す（Cf. Zach, op. cit., S. 92）に左右せられて中斷せらるるものあるは注意すべし、獨逸の諸大

都市は殆んど全く一層低き千分比を示す、凡て四七中の五大都市に於て乳兒死亡數は、從來の最順年たる一九一二年中一〇〇%より幾分低かりき、(全獨に付ては同年一四七%たりき) かくてその當時にありては右十分一の率は全獨に付、近き將來に達し得へき乳兒死亡最低率視されしが、爾來二十年を経過せざるに之か實現を見たるは、前に指摘せるが如し、(部分的に獨逸に比し著しき優越を示せる諸國との比較につきては、注意を注ぐの要あり、即ち少くとも是等諸國中の數者にありては出生後最初の數日又は數週内に死せる子の比較的多數が、死産として記録さるゝか、或は全く記録に洩るゝことを注目すべし、此點に付名日上一割以下の低率を捻出し、得々たる一國の材料を採り、その内實を判るが如きは大人氣なしと考ふるを以て之を問はず、唯後出英國の材料が古くより低率を示せるに就きても、上述の如き事情の介在を忖度せしむと雖も、今之を確言するの根據を明かにし難きを以て、俄かに之を斷ぜず) かくて乳兒死亡數を謂はば一六〇%より、一割又はその以下に減じ得たりとせんがそは人口對策上より察し、一般死亡數に變動を伴はすとの假定の下、出生數又は蕃殖率が七・一%丈け高まれることを意味するの外なし、即ち一六〇%の乳兒死亡率によらんか、そは出生毎一〇七一人中一歳滿了前に一七一人死することとなり、從ひて九〇〇人は第一歳を滿了す、そは一割の乳兒死亡率に於て、初生兒毎千につきて看ると全く同じことに當る。唯此關係より推して一般に乳兒死亡低減を目的とする諸方策を觀し、之により出生率低下を報償するの力ありとするは全然合理的たりとするを得ず、而してその誤謬は生命の總量決定上に於て、出生と死亡とに備はれる力の強弱を示すの一例證視するを得べし。之を明かにするの目的上人口十萬を有する一都市に於て、年出生率千に付二五たり、その乳兒死亡率は出生千に付百たりと假定せよ、その際

一年内の出生数は二百五十なり、乳兒死亡数は二五〇たるべく、從ひて一年に二、二五〇の純増加を看ることとなるべし、今乳兒死亡率を出生千に付五〇に引下くこととならば、純増加は二、三七五たるべし、されど出生率が千に付三〇となり又低下されたる右の乳兒死亡率五〇が持續するものと假定せんが、一年の終りに於ける人口増加は、二三七五の代りに二、八五〇たるべし、人口の純定量觀に甘んせんかその定量に及ばざるべき出生及死亡の意義は、右一例により明かなるが如きも凡そ子供増福事業の功績は、右の如き算術式にては充分に表明せらるるを得ず、蓋し死亡は一の最終結果に外ならず、その他の諸結果が見積らるべきものとせば、その計算中には低下されたる乳兒死亡に、殘存者の健康増進を組合はすの要あるべきを以てなり。¹⁷⁾

茲に注意すべきは、獨逸に於て最近數十年中一乃至六歳の死亡が、滿一歳未満に於けるよりも百分比上一層著大に減ぜることなり、Borkiewicz が前掲書(四〇頁)中、一八七一乃至八一年々平均に對し、一九〇一乃至一〇年々平均死亡率の低下を、百分率に換算して示せる所によるに

	〇一歳	一一二歳	二一三歳	三一四歳	四一五歳
男	二四%	三九%	五六%	五九%	六〇%
女	二五%	四〇%	五六%	五九%	六〇%

なり、こは部分的には一乃至六歳の死亡につき傳染病(特に麻疹、猩紅熱、實布の里亞等)中その防遏上最も判然たる進歩を遂げしものに、關係を有すること乳兒死亡に於けるより多きの事實を擧げて

17) Cf. Newsholme, op. cit. p. 114.

釋明し得べし、されど之と同時に生計の一般向上以外、出生減退は之を生むに預る所なしとするを得ざるべし、現に嫡出蕃殖率の多少と小兒死亡率の多少との間、鮮明なる一平行關係存するは信賴すべき統計々數に照し繰返し舉證せられたり（特に M. Rubin u. H. Westergaard, St. der Ehen. 1890 並に Westergaard, Die Lehre von der Mortalität etc. 2. A. 1901, 10. Kap. 參照）加之此問題に付所得限られたる分子にありては、子少きに比し子多きを以て育て上げ難しとすべきこと、之に關係あるのみならず、（此外尙出生が短年月内に引續くときは、母の身體を弱むることにより、子の生存能力乏しきに至る）同時に「子の死喪は生理上及心理上進みて子を産むことを可能ならしめ、又その事由の釋明とすべきこと」之に關係あり、（Westergaard の言明）而も亦問題に上れる關聯につき注目し得べきは、特定社會階級に於て一定の年齡（例令は一〇又は一五歲）を生殘せる子の數が、出生者數との比に於けるのみならず、その子等を生める現存夫婦數との比に於ても（從ひて蕃殖力は出生の材料により測定され得べきのみならず、一九二一年英にその例を見たるが如く、現存夫婦數並に子數の靜態調査によりても、之を窺ひ得べきことを注意すべし）亦少き蕃殖率の際には、多き蕃殖率の場合に比し、高き比率を示すこととなり、されど此事實を舉げ嫡出出生減退が、現在獨逸に於て事實上示さるるが如き蔓延程度及強度に於て、之に照應せる小兒死亡減少により、相殺され得べしとの期待を立つるの根據に供したりとせんが（Würzburger, Der Geburtenrückgang u. seine Statistik, im Schmollers Jb., 1914 u. K. Oldenburg, Geburtenrückgang u. Aufwuchssiffern, ebendasselbst, 1916 參照）そは將來を觀すること餘りに樂觀に過くとすべからん。何れにしても子の多産多死少産少死は普

通なりとしても、之を以て自然の軌道的制約視するを得ず、梅雨期に雨なくして自然の無軌を疑はしむることあるが如く、之が例外の關係を見ることあり、そは知人の家庭に就き日常經驗し得べき所たるのみならず、一共同體否一國に關する統計にありても之を發見し得べし、人口統計上種々注目を惹くべき佛國が、現にその一例外をなすや、夙に Hesse¹⁸⁾ 指摘したる所の如し、而して此問題に付古くより興味を有し、周到又嚴密なる史的地方的比較研究を遂げ、比類尠き業績を擧けしは、現代に於ける民文研究の世界的大家 Newsholme¹⁹⁾ なり、當節の連葉なる獵奇的讀者を倦ましむべしと雖も、吾人は之を紹介せずして己む能はず。

Newsholme は、その著書中英蘭及威爾斯に於ける蕃殖率詳言すれば一五乃至四五歳の有配偶女千に對する出生の割合、及乳兒死亡率經過を一八五一乃至七〇年中每五年年平均、爾後一九二一年に至る迄の毎歲計數として、詳示せる一表を掲げつつその解析又解釋を進む、之に就き豫しめ注意すべきはその研究上私生を問はさることなり、されどかかる出生は右の長年月中にても決して總出生の六・五%（一八五六—六〇年中、本邦にありても第五十一回年鑑によるに、大正六年の比九%に近かりしもの、爾來漸次その割合を低下し、近年六・五%の上下に小動搖を示す）以上に出てしことなし、年次を降りては四%に過ぎず、かくて變遷の大勢は之を計算外におきても實質的に影響せらるるなし、一八七六年以前出生率に外觀上微遞増の趨勢を示すは、出生の記錄に於ける缺陷多きに歸し得べし、一八七六年以後は出生率に於ける常勢遞降初まれり、而して右詳表に本つき之が每五年の降下を百分

18) Cf. Hesse, Art. „Steblichkeit u. Sterblichkeitstafeln“ im Elsters Wörterbuch, 3. A. II. 1911 S. 983.

19) Cf. Newsholme, op. cit. p. 114 fg.

比として示せる所によるに次の如し。

乳兒死亡率	每五年降下百分比%
自一八七六—一八八〇	至一八八一—一八八五年 五
八—一八五	八六—一九〇年 六
八六—一九〇	九一—一九五年 三
九一—一九五	九六—一九〇〇年 四
九六—一九〇〇	一九〇一—一九〇五年 四
一九〇一—一九〇五	一九〇六—一九一〇年 七
一九〇六—一九一〇	一九一一年—一九一五年 一〇

右兩率の變遷を圖示せる二曲線の比較は知見を授くる所多し、即ち蕃殖率は七七年に下降し初め、爾來殆んど中斷を見ずしてその趨勢を續けたり、乳兒死亡率は年々大に變じたり、されど一九〇〇年迄はならして低下の傾向を示さざりき、こは一八五一—

六〇乃至九一—一九〇〇年の毎十年年平均乳兒死亡率上次の如く示さる

一五四 一五四 一四九 一四一 一五三

第二十世紀に至りて毎五年の最初四回中當該死亡率は次の如し

一三八 一二七 一二〇 九〇

而してその曲線上割合に新らしき部分は、乳兒死亡率がその以前の準位に還らんとするの徴を示さす、(現に一九二三年には夫れ迄の最低率六九を示す) 一八九九年の出生率が一八七五年に於けるより、二〇%低きは注目を惹く、されどその間の二十三年間乳兒死亡率は何等低下の傾向を示さす、一九一四年の出生率は一九〇〇年に比し一七%低かりしに、乳兒死亡率はその十四年間に三一%低下したり、かくて主張され得べし、最近十四年間に於てはその以前の二十三年間に於けるより、總出生中遙かに高き割合は、従前に比し小なる家族内にて、推測上一層順良なる境遇の下惹起され、

その結果を英蘭の低下されたる乳兒死亡數に伺はしむと、されどこは尙低下されたる出生率[、]國民的に乳兒死亡の成行に、大影響を及ぼせるため乎、或は小程度丈け影響せるに過ぎざるため乎疑を挿ましむるの餘地あり、此問題につきては次の諸事實を引用するの要あり。

Newsholme はその著新版公刊に先ち、子の死亡に關する數官廳報告 (The Annual Report of the Medical Office of the Local Government Board 中) を發表し、同問題に付世の耳目を喚起したり、以下の事實は同報告より抜く。

一九一〇年に發表せる一報告 Report on Infant and Child Mortality. (Cir. 5263 Cd. は政府發行書一九〇〇年來の逐順番號なり) 中、英威一圓と同等又はその以上の乳兒死亡率を有する英威の十二州^{カウンチース} (地名を伴へば shire と呼ぶ) に於て、出生率は英威の分に比し、五%以下なるよりその以上二一%なるもの迄種々相違せり、然るに乳兒死亡率何れも英威分に比し、低きこと二〇%以上なる他の十二州にてはその出生率英威分に比し、一二%以下なるよりその以上一七%なるもの迄種々の差あることを示すべき統計は擧げられたり。

別々の州一つ一つに就きて見るに、その背馳一層大なるものもあり、即ち Lancashire の市趣滿ち充ちたる州にては、全國平均に比し出生率一%低きも、乳兒死亡率は二二%高し、Shropshire の田趣勝てる州にては、全國平均に比し出生率は二七%高きも乳兒死亡率は二五%低し、高出生率と低乳兒死亡率とてふ交聯へ外れたる最著の一例は、虞らくは愛蘭たり、そは一九〇一年標準化

されし出生率、英蘭の二八・四に比し三六・一を示し、その乳兒死亡率にありては、出生千に付英蘭の一五一に比し一〇一を示したり、一九〇一乃至五年英威の登簿州四六の標準化出生率と、同数の州乳兒死亡率との照應係數は、小數〇・三六として示されたり。報告中諸結果を要約せる所によるに大家族は必ずしも高乳兒死亡率を含意せざるや明かなり、高出生率と高乳兒死亡率との關聯は、多分大部分は大家族が赤貧階級中に普通なること、是等家族は特に夥多の乳兒死亡を生むべき凋落淪溺の諸誘因に曝さるることに因るとせり。

一九一三年迄に集めたる經驗に照し草したる同名の第二報告中、(Cf. 666)上の叙説を引ける後追加したり。此主張に尙附加へて叙説すべきことあり、即ち一の大家族が貧困の度甚しく、ために母又は子の營養不足を引起すの狀ありとせば、そは子がその健康及生命を保つの見込を、殺くの傾向萌さるるの外なし、この極端なる貧困を除きて、一の大家族が母の過勞及家内の清潔に關する注意不充分を伴ひ、特に子の食物に關する關係上然りとせば、そは同じ結果を助長するの外なきを承認し得べし。本報告に取扱はれたる二四一の市地域に於ける出生率には、極めて著しき相違あり、而して低き出生率と高き乳兒死亡との間に、照應を見ること珍しきに非ず。出生率の變化が最近十二年間に經驗されたる乳兒死亡減少を助くる點に、微細の働以上にその作用を及ぼせること、之により及ぼされたる結果ありとしても、そは上に指示せる如く主として間接的たりとすべきことさへ、あり得へからざるに似たりと。

一九一四年 Copeman, Manby, Farrar 及 Lane-Clayton と共同研究の結果、Lancashire の幼者死亡に關し發表せる第三報告 (Ca. 7511) 中、Lancashire の諸小都タレンスにつき次の比較計數を示したり。

	出生率	乳兒死亡率	出生率	乳兒死亡率
Burnley	二三・〇	二七・七	Str. (ford)	一七・一 九五
Farnworth	二三・三	一八・〇	Wigan	二七・九 一六五
Colne	二〇・六	一三・〇	Widnes	三一・四 一四〇
Nelson	一七・五	八・七		

同じ小都 Stretford の諸區 wards 中畧同じ乳兒死亡率 (一〇・八對一一・一) を示せる二區は、出生率に於て一七・八及三一・〇の對立を示したり、而して Lancashire に於ける經驗の賜は、次の如く括約されたり、一の大家族は低率乳兒死亡と兩立せすこととなし、乳兒死亡は小家族に富める共同體內にても過多なることあり、兩者の關係は複雑なり、主たる影響とすべきは、子供少數の影響よりも、寧ろ家族生活の安樂標準を向上せしむべき諸事情の影響たるに似たり、低き出生率が高き安樂標準の表現たりとすべき程度に於ては、そは低き乳兒死亡率と組合はさることありとやせん、Farnworth, Burnley 及 Wigan の如く、市衛生及家庭生活の標準低級型たること、之を坑夫の多數家庭及纖維職工の數家庭に發見する通りならば、高き出生率と夥多なる乳兒死亡數は通常組合はさる、されど Burnley の經驗によれば、乳兒死亡率が夥多を續くるに、その出生率は低下することあるを示すと。

右の問題に牽聯して逸すべからざるは、前にも引說せる蕃殖力靜態調査の材料なり、尤も出生證書又は戸籍上母の年齢、及その以前に同夫婦間に生れし子の數に關する報告あらば、そは寧ろ動態統計の材料に屬するも、之を小都市又は小地區に關する蕃殖力特別研究の目的に利用し得べし、こは一見簡單なるが如きも實は然らず、蓋し養育の方法兩親の社會的地位等問題に大關係ある諸因子を斟酌して原數を細分することとせんが、過解析の弊に陷り、統計的計算の目的上數少きに過ぐることとなればなり、かくて人口實查に際し同一目的を達せんとすることも考案せられ、各夫婦に就きその産兒數を問ふこともあり、その際將來子を現在以上に生むの見込薄き夫婦を、重視すべきや謂ふ迄もなし、而してその調査上普通に類別の標準に供すべきは、母の婚姻年齢及婚姻持續年數なり、²⁰⁾そは兎も角として英にありては一九一一年の人口實查に際し、婚姻持續年數及誕生し又存命せる子數に關する問を發し、かくて社會階級、職業、出生地、住居の地方による蕃殖力變化を解析せしめ、又その婚姻持續年數別をも明かにせしめたり、その結果蕃殖力と乳兒死亡との關係に關し、信賴價值ある計數への一適眞は、英 the General Register Office の T. H. C. Stevenson, M. D. が右實查に本つて公けにせし結果速報 *The Fertility of Various Social classes in England & Wales from the Middle of the 19. Century to 1911.* (Journ. of the Roy. Stat. Soc., vol. lxxiii, pt. iii) につきて見るべし、その括約は以下所掲の表に示さる、是等階級中初めの五者にありては、蕃殖率と乳兒死亡率と同じ方向に變ず、こは平均結果にして幾多の例外は起る、され

20) Cf. Prinzing, Aufgaben etc. S. 33; Bailey & Cummings, op. cit. p. 85.

どその他の階級に付表の示す所は、Newsholme が一九一三乃至一四年の醫官年報中左の如く指摘せるとその意相通ず。

英威の一〇歳及その以上なる總男數の三・四%、總女數の四・四%を使用する、纖維工業にありては、蕃殖力と乳兒死亡とは反對方向に向ひて大に變ず、又一〇歳及その以上なる總男數の四・六%を占むる農業労働者間にありては、殆んど全國平均に近き蕃殖力に伴ふに、極めて低き乳兒死亡率を以てせり、一〇歳及その以上なる總男數の六・七%を占むる鑛山労働者は夥多なる乳兒死亡率と、全國平均を越ゆる程度更に高き蕃殖力とを示したり、以上引ける諸計數は、極貧圏外にありては高出生率と高乳兒死亡率との間に、避け難き一關係全く存ぜずとするの見解と兩立するに似たり。

諸社會層に於ける蕃殖率及乳兒死亡率 (英威一圓に關する當該二率に對する百分偏倚)

番號	蕃殖力%	乳兒死亡率%
I、上中社會層	△二七	△三九
II、介在	△一九	△一五
III、熟練職工	△六	△一〇
IV、介在階級	△二	△三
V、不熟練職工	十三一	十二二
VI、纖維工業労働者	△二三	十一九
VII、鑛山	十四二	十二八
VIII、農業	△一	△二二
諸社會層通算	一〇〇	一〇〇

備考、△を附せるは負數即ち通算以下への偏倚歩合を意味す

Stevenson は蕃殖力に對する乳兒死亡の關係を以て、密にして又複雑なりと考へ、幾分か又相互的なりと觀したり、即ち「多子の出生あるがために子供の死多く、又比較的少數の子殘存する

がために多子は生る」とせり。

要するに以上幾多の事實は、大家族及夥多乳兒死亡間の關係、不可避ならずとするの結論を狙ひて引用せられたりと雖も、實際經驗上大量として二者は相符せらる、(著者は英學者には珍しとすべき用例により、*mas or massed Statistics* の語を使用せり) 例令は一九一一年蕃殖力實査の大量統計は、右死亡が最大家族にありては最小家族に於けるより、約五倍の高きを占むることを示し、佛の大家 *Much* は、同國に於て後日大家族となるべき家庭に生れし長子は、比較的小なる家族の長子に比し、死亡率遙かに大なることを示したり (*Journal of the Roy. Stat. Soc.* 1920) 之に對し以上の諸研究上唱へし論旨によれば、満足なる社會及衛生事情を備はらしめ、子に相當なる世話行届くの仕組之に伴ひ、知識及行動の高標準敏速に達成せらるべしと假定せんが、小家族と大家族とにより經驗せらるべき死亡の差は之を見ざるに至るべし、包容さるる諸因子は夥し、貧てふ類同問題間に於けるが如く、諸因子の複合中より數元素を取去ることにより、高出生率と高幼者死亡率との關係を、全然取除け兼ねとしても、實質的に之を減少せしめ得べしとするにあり。

六

「水は器に従ひて、そのさまさまに成りぬなり」とは、少年當時に於けるが如く今も尙人の子等と共に愛誦する唱歌なり、子を恵まれつつ之を方槽内の泥中に投じ、一載を待たずして鬼籍に入らしむるや、或は團圓なる大タンク内に之を愛くしみつつ、やがて優良兒として天下に選奨せら

るを待たんとするや、大觀すれば之が選擇上此大教訓の澤に浴する所多しとすべからん。夫れ赤子の統計は獨り、その死亡統計に限ることなしとするも、²¹⁾その死亡統計は古くより廣く又深く研究されたる所なり、吾人は先づその算法及意義等を究め、本邦の近況に一瞥を試みたる後、世界の大勢に鑑みつつ之に關聯せる一大問題に言及したり、その間後段に於て主とせる所獨及英の事情たり、而も一部學者の研究紹介に止まると雖も、こは素より本意に非ず、要は之を以て本邦事情研究の先驅に供し、特に又弘く問題への興味を喚起し、上説せる所が果して幾何か本邦事情と合致又は背馳するやの研究を、促進せんとするにあり、「古人小兒を芽兒げじといひ、また嫩藥なんやく花けといひて、草木くさきの初めて萌出花の初めてほころふるにたとへはべれば、そだてざらめや」とは、香月啓益（同人ニ就キテハ昭和六年一月發行立命館學叢所載拙稿參照）の著「小兒必用養育草そだてくさ」に附せる同家兄秀房元祿十六（一七〇三）年の序中に説く所なり、同様に又「古謂小兒爲ニ芽兒ニ、如ニ草之萌ニ如ニ水之漚ニ、故其命レ方曰ニ保嬰ニ曰ニ全幼ニ者蓋不レ欲ニ以レ峻攻ニ耳一」非下特以ニ錢氏峻攻ニ爲ニ不レ可用也、視下古既遠元氣亦殊、不レ欲ニ直施ニ之於今ニ耳一」とは、宋神宗の朝に於ける太醫丞錢仲陽の幼科遺方に據れる蘇鑑校註「小兒直訣」序中に、吐露されたる識見なり、實に天地の氣生々にありとするを得は、その生を暴殄するは自然の天意に非ず、天の旨趣は寧ろ生の全健保壽にありとするを得ん、保全の道を盡すべきは啻に國寶及天然紀念物のみに非ずして、寧ろ之を創作し之を養護すべき人命の保養重んずべし、特に舊の生命に就きて然り、吾人は此見地より乳兒死亡輕減問題を重

21) Cf. Fischer, A., Art. „Säuglingsfürsorge,, im Hwt. d. Sttsw. 4. A. 7. Bd. 1926 S. 156 fg.

視し、現に又斷片的には全國幾多の小兒科病院及開業醫により、仁道の實績擧げられつつあるを信ぜんと欲すと雖も今その諸實例を搜すの餘裕を有せざるを惜む、從ひて茲には單に大阪市役所産業部か本春「大阪市細民街の出生及死産調査」を發表し、右兩現象を諸因子の複合視し、之が解析を進むるの意氣を窺はしめたることを附記し、その調査は引續き之と關聯淺からざる乳兒死亡にも及ぼさるべきを信ぜんと欲す。

以上説ける範圍内に訴へても明かに看取し得べきは、乳兒死亡研究の一面が、實は家族生活の比較又推移に關する研究たることたり、此見地に本づきその統計的研究を更に擴け行くべき方面は多し、特に重視すべきは遺傳及環境特に貧に二大別して、考へ得べき原因研究なり、之に關聯して傳染病と乳兒罹病及死亡特に其の月別との關係研究は、邦人として興味深かるべき問題たり次に子の序數及長年授乳の習慣と乳兒死亡との關係は、本邦事情に照し特殊問題として究むるの値あり、之と共に蕃殖力に關する靜態調査の例も存することを想倒すれば、本邦行政統計の將來にも、一新光明郷存するを覺ゆ、兎に角良風美俗視せらるる家族制度に就き、之を脅かさんとする風聲に對してさへも過敏ならんとする諸屬僚は、統計行政に關しても婚姻持續年數及子數の調査は謂ふ迄もなく、否その以上に親子又孫同棲の家族數を調査して、家族親和率とも謂はば言ひ得べきを闡明し、世界に、我國風を誇負するの用意にも、忽かせなることなかるべきを吾人は確信せんと欲す。

本編劈頭古き二醫書を引けるに就きては、最後に尙一言しおきたきことあり、即ち之につき讀者の注意を促さんとするは、諸類書中の一つとして *Zwei berühmte chinesische Ärzte des Altertums Chouen Yu-J und Hoa T'ouo von Dr. med. et phil. Hübotter. 1925* (著者は柏林大學醫史の員外教授當時熊本在留) あることなり、Yu-J とは淳于意即倉公の謂なり、著者が同論文中譯述せるは、「史記」の倉公傳なり、Hoa T'ouo とは華佗の謂なり、著者が種本に使ひしは「古今圖書集成」なり、新船載の洋醫書を金科玉條視しつつ、かかる研究は三千年の昔に還れとするが如きは、一のアナクロニズムに非すや、吾人は醫學に通ぜず又支那學の素養淺しと雖も、學餘屢々好みて緋くは「素問」なり、徳川時代の儒風昭和の今日に至る迄累を及ぼせる乎、中等及高等の漢文讀本中豫防醫學の福音とすべき支那古醫典取入れられしものあるを、予輩寡聞にして未だ知らず、同書特に「上古天真論」の如きは、思想雄渾、文章も古雅、禮記の禮運又は老莊の思想と共に、泰西舶來の思想混亂時代に相應はしき讀本と考へらる、唯予輩は淺學にして、同書に宿せる諸觀念及難文字を解し得ざるもの多く、之が講釋を聽かんと欲すること多年なりと雖も、朝鮮滿洲に渡らはいざ知らず、内地の學府中にはその便備はれる所なきものの如し、謂ふ莫れ、皇漢醫方の實行運動を禁じたる明治十七年の第三十五號布告は炳乎として存すと、されど法令又は先例の認むる範圍内に於て、漢又皇の古醫典を研究するは自由なり、否急務なり、仄かに聞く、現文政當局の諸賢良は、思想糾弾に猛からずして之が善導に威ありと、想ふに日ならず一臂の勞は文教の府により此忘れられんとする新天地開拓にも揮はれて、更生の機運醸成せらるるに到るべきを。(一九三三、七、一〇脱稿)